

## 烏森トレッキング回想記

### 第八回

日時：'01. 12. 8 (土) ~ 12. 9 (日)

概略行程：

1日目 初狩駅～椎茸栽培場～高川山 (975. 7m) ～ (古宿コース) ～リニア資料館～田野倉駅～大月駅くわさい～桑西くわさい～ 宿泊／破魔射場・金森 (民宿)

2日目 桑西～大月駅～岩殿山いわどのさん (634m) ～大月駅

メンバー：山田、吉川、小林、森、磯崎

初めての、12月の山歩き。

展望を求め、富士の山梨側入り口、大月を訪ねる。

小林氏が初参加するも、米本氏が脚の調子今一つで、残念ながら初めての欠席。

空気、凜と張り、陽光柔らかな早朝の「初狩駅」に、駅員相手に騒ぐ男一人居り、その傍らには下を向く男、もう一人。

“何しろ、「ホリデー・パス」がお得と教えられ、大枚二枚に40円払って買ったわなあ。ところが何だって、使えるのは今日が限りだって？

でも俺、今日は帰らないよ。端っからその予定だよ。”

“えっ、払い戻しは駄目だって？そんなつもりで訊いちゃあいねえよ、フン！（苛立ち表現）”

“つまり何だよな、1,650円で来られる所を、ホリデー・パス代2,040円払って、更にご丁寧に、区域外料金190円を払わせて貰ったってことだよなあ。

間抜け幹事の勧めとは云え、気付かなかった俺も悪いよ。でも天下のJRさんともあろうもんが、客が勘違いしちまうような、そんなべらぼうなことをやるたあ思ってもいねえもんなあ。”

“こう言っちゃなんだが、明日の日曜日をホリデーと思って可笑しいかい。ホリデーにホリデー・パス使って可笑しいかい、えっ…？”

“なるほど、お偉い人が決めたことで、お兄さんは係わっちゃいねえもんな…、そりゃそうだ、どう仕様もねえか。”

“あーあ、朝から験が悪いや…畜生！山へ登るの止めて、今日一日、JR乗り回しちやおうか。”

(駅員奥に入り、再び登場)

“…、何だいこりゃ…えっ？白簇史朗撮影の「秀麗富嶽十二景」のポスター？…なかなか綺麗じゃねえか、…えっ、くれるの？本当にいいのかい、悪いなあ、…折角だ、貰っちゃまおう。”

何か気遣わせちゃったかな…、邪魔したなお兄さん。”

【余談15】民営化後のJRは、着実に改革が進められ、素晴らしい経営振りである。

新幹線建設に際し、既存の不採算路線は地元第3セクターへの経営委譲を条件とし、いつものまにやら、「ひかり」を「のぞみ」と名称変更し、事実上の値上げを実現。

我らへの影響は、トクトクキップ、「高尾・相模湖フリーキップ」に続き、「奥多摩・秋川フリーキップ」が廃止され、「ホリデー・パス」も2,300円に大幅値上げ、実質的利用価値はほとんど無くなった。（'04.2）

“話は聞いて貰うもんだ。ところで後のメンバーはどうなってんだ？おっといけねえ、携帯に電話が入っていた。”

“もしもし”、“…何？、電車に乗り遅れた…、で、大月駅からこっちにタクシーで向かってるってえ！”

“何でえ、もっと大馬鹿が居やがった。”

若干の遅れにて、無事出発。初冬の陽を受け、高川山への林道に入る。

今後のメイン・ルートとガイド・ブックお薦めの道は、登るに連れ、小石だらけの悪路となり、登山道に入ると霜解けによる泥濘道と、何とも歩き辛い泣かせ道。

それでも順調に高度を上げ、山頂には予定より40分早めの昼前に到着する。

【余談16】計画タイムにはかなり余裕を持たせている。

例えば、初狩駅から高川山迄の標準コースタイム（休憩時間等を含めぬ実歩行時間）は90分であるが、今回の計画では、160分を予定した。

結果的には、120分の歩きであったが、コースタイムはあくまでもスケジューリングの参考に過ぎず、さほど拘る必要はないと考えている。歩行時間を気にすると、間違いなくバテが早く、事故にも繋がり易くなり、肝心のトレッキングを楽しむことができない。

今後共、マイペースの歩きに専念するつもりである。（あれ、どこからか拍手が！）

なお、トレッキング一般論では、50分の歩きに10分の休憩と云われ、上記コースに当てはめると、2ピッチ100分のコースとなる。

賑わいの山頂は、南正面に据わる「富士山」は黒ずみの山容を見せるのみで、南西面の南アルプスも銀嶺を隠し、残念ながら期待したシャッター・チャンスは得られず。

それでも、北面の「滝子山」（1,590.3m）、「雁ヶ腹摺山」（1,874m 五百円札の富士撮影地として有名）、東面の「九鬼山」（970m）、丹沢道志山系はまづまづの眺望で、山頂周辺に感嘆の声が絶えず。

【余談17】奥多摩、および中央沿線地区の山から、北側、「鷹ノ巣山」(1, 736. 6 m 某氏がビバークした山)、<sup>たかのすやま</sup>「雲取山」方向の展望は比較的恵まれる。

しかし、南の丹沢、富士、南西の南アルプスは、昼前のある時間帯を過ぎると、太陽の位置関係によるものか、眺望は後退してしまい、特に、「富士山」は、山頂付近に雲がたなびき、昼を過ぎて雄姿を観るチャンスは少ない。(学問的には、陽射により上部空気が暖められ、それを受けて山麓部冷気が谷風となって上部に上り、山頂部の暖気を冷やし雲を造成させるとのこと)

なお、「秀麗富嶽十二景」は、大月市が選定した同地区、十二山からの富士十二景で、「高川山」、「滝子山」、「雁ヶ腹摺山」、「九鬼山」、「岩殿山」等が名を連ねている。

山頂南斜面の岩場に場所を確保し、楽しい食事。

毎度ながら、色んな食料が提供され、吉川家手製の「おにぎり飯」に頬を膨らませ、なんと、小林氏自らが早起き調理した煮物2品を馳走になり、感謝、感謝で大拍手！

道と気付かず、登山道にシートを敷いて食宴するパーティ寄り、事情を説明し移動を勧めると、今更面倒とばかりに、岩を跨いでの迂回を求めるには、ただ唾然。

周りからの非難も加わり、やっと片付け始めるが、中高年に限らぬマナーの悪さはどうしたものか。

しばし展望を楽しんだ後、人少ない古宿コースを東南方向に下り、「小形山」を巻く。九十九折りの急坂は落ち葉に埋もれ、膝に負担の少ない冬枯れの道。

途中の谷間に時期外れの紅葉を見つけ、樹の種類がとか、日照条件がとか、種々、原因究明するも、さすが自信有る回答は無く、**最後の結論は、“こんな時、大谷氏が居たならなあ”**で、一件落着。

時間が有ればと計画した、「リニア資料館」に立ち寄り、幸運かな451Kmの試走を観る、速い！

無事、初日の予定を終了し、富士急／田野倉駅へ歩く。

駅への道を問うた親父、返答に今一つ要領得ずも、一応、我々を案内する風にて後に従う。他のメンバーは、素知らぬ顔で先を歩くが、解っている筈は無く、時折、後ろを振り向くは笑止千万！

途中、親父の自宅前で別れたが、やはり正確な導きであった。

大月駅から、バスに乗り継ぎ、今夜の宿へ。

終点のバス停、「桑西」に着く頃には夕闇が迫り、今度は駅から同乗の女の子にガイドを

得、無事、「民宿 破魔射場」に入る。

彼女は知的障害者と見受けられたが、心のこもった案内振りに深謝する。別れた彼女の向かう丘上に、明るく灯をともし家一軒、彼女の帰りを待つ家庭の明かりに相違なし。

「破魔射場」は北西の山、「ハマイバ丸（1, 752m）」から。

かつては溪流釣客用の山宿であったが、上流ダム工事の開始により漁場を閉鎖し、民宿ユースに変更したとの由。

入場後、声を掛けても応接がなく、土間に据えられ、野趣豊かな達磨型ストーブに木切れを足しながら、暖をとるが、電話予約時、“釣り宿をやめているのは知ってるね”と、やけに商売気のない大女将の対応振りを思い出す。

安心、安心！ 間無く、娘さんに案内され、檜炬燵の整えられた和室に落ち着く。習いで開く窓外は、漆黒の闇、溪流音のみ鳴り響く。

他に泊客が居ないのか、静寂に包まれた山宿は、何もかもスペースたっぷり。奇怪な岩石が立つ浴槽は全員が入っても十分な広さで、湯量も豊か。

水滴が硝子戸を滴り落ちるのを見て、外部との寒暖差を知るが、湯加減上々、“いい湯〜だな”と一唸り。

**宴の席は、びっくり仰天、「囲炉裏部屋」！** 願望の募りから、勝手に事前案内した夢が実現。

若干、整い過ぎてはいるが、囲炉裏を囲み、鉤に掛けられた「牡丹鍋」と、「おでん」の馳走で飲み、本日の行程を省みる。

部屋に戻って矢倉炬燵に入り、二次会開始。

テーブル上に、地元の酒、「笹一」の一升瓶を据え、互いの近況を当てに、冷酒で飲む。冬の夜は深々と更け、窓の外から、せせらぎの音が途切れること無く響き渡る。

翌朝も快晴。

何時もと違い、椅子掛け、土間食堂での朝食が、又、一興。

**奥で斜に構える女将は、推量通りの愛想無しも、給仕をしてくれる娘さんは、明るく快活、器量良し！**

バス停、「桑西」に歩き、大月駅への始発バスを待つ。

待合室には、手作りによる小振りで愛らしい座布団が並べられ、地元人の心遣いを想うと一段と暖かさが増す。

我等5名で出発したバスは、途中、徐々に乗客を増やし、いつの間にか満席となり、病

院通いの仲間同志か、楽しい会話が車内に弾む。

その時、突然とも云うべく、眼前大きく、真っ白な富士が出現！

“オーッ”と、つい声を上げるが、地元人も認める威風堂々たる雄姿を民家軒上に追い、今回のトレッキング目的はこれで果たせたと確信する。

しかし大月駅から、「岩殿山」への歩きは、正に、“富士を見ながら登る山”の見本で、駅から登山口迄、登山の途中、山頂からと、いずれの場所からも、そして昼に掛かっても、その姿を隠すことがなく、終日の富士三昧。

ただ、メンバーから、“山麓散歩コース”のレベルと案内したのは、若干ガイド書を読み誤っている”との厳しい指摘を受け、“一気の登りが続き、なかなか悔れないコース”と訂正し、なんとか了承を得る。

**【余談18】** 第二回の例もあり、事前の下見は大体行っている。

例外は第五回の「青梅丘陵」と、今回の「岩殿山」で、どちらかと言うと行程が短く、時間的にも余裕が有るケースである。

今回はともかく、前者と、第六回の「夏山」訪問時期には、若干の悔いと反省がある。

眼前に富士を見据える、山頂下の丸太に座り、おにぎり弁当。

抜ける風が心地良く、時折の強風に、帽子を深く被り直したり、小石で食卓シートを押さえたりするのがまた楽しい。

若干、気になったのは、何故か、山頂でと言うより、公園で食事している風が感じられた点で、メンバーは如何也。

いつものことながら、2日目の昼食は、会の終わりが近づくを意識し、無事を安堵すると共に一抹の心残りが隠せず、つい次回を語る。

なお、姿を隠さぬ富士を後に、下山路を別コースに取り、大月駅へ。途中、山田氏が脚を痛めるアクシデントあるも、大過無し。

駅前のフランス風レストラン、「レストラン・アダージッシモ」に入り、冷えたビールで、“お疲れ様！”と乾杯を交わす。

メニューに、「枝豆」、「冷奴」、「焼き鳥」を探すが、意味が不明で愛想無しのカタカナばかり。

帰路の「特快」車内は、酒も手伝い、メンバー爆眠。

**【余談19】** ‘02. 1. 12 (土) TBSラジオ／土曜ワイド “永六輔、その新世界”

(毎土曜日、8:30~13:00)を、「陣馬山」登山中、南西に大きな富士を見ながら聴く。

平井麻衣子キャスター、“本日の「乙女探検隊・関東新地図」は、山岳写真家として皆様ご存じの白簾史朗先生に、故郷大月市の「岩殿山」をご案内して貰います。現在機材を持って、先生とご一緒に登山中ですが、私の目の前には、大きくて真っ白な富士山がその雄姿を見せています。途中の資料館には、先生の「秀麗富嶽十二景」等の写真展示コーナーも設けられているとのことですが、先生、本日は宜しくご案内のほどお願い申し上げます。

### 『彼の興味有る話2話』

1. 静岡側からの富士は、観る角度により風貌様々にて、「御殿場富士」、「三島富士」等、場所により呼称を変える。一方、山梨側からの「富士」は一つであるが、時の流れに伴い、刻々と表情を変えるのでその点に注目。
2. 登山体力について、登りは1/3の力で、下りは余力を残し、2/3の力で。  
(皆さん、どう思います?)

<余談の付録／平井麻衣子さん> ‘04. 2. 21 (土)、「高川山」登山中に聞く土曜ワイド。

「乙女探検隊」のゲスト、元小結舞の海が平井麻衣子キャスターと、「両国界限」を案内。彼らしい、一見誠実そうな、それでいてシニカルなコメントが続いたが、終了間際の一言、  
“ところで、乙女探検隊の「乙女」はどちらに居られるのでしょうか?”  
その一瞬、麻衣子さん、スタジオばかりか、リスナーも凍り付く。